

第3節 地域史研究の中で見る発掘調査の成果

長野市浅川扇状地遺跡群は、弥生から古代・中世にかけての長野盆地最大級の集落遺跡である。同遺跡群は、多くの遺跡から構成されており、総面積は14,574,386m²をはかる（長野市行政地図情報による）。県埋蔵文化財センターでは、同遺跡群の吉田田町遺跡、桐原宮北遺跡、桐原牧野遺跡及び桐原要害の中を2011年～2020年の10年間にわたって24,695m²の発掘調査を行った。調査区は同遺跡群全体からみれば面積比で0.17%を占める。今回の調査区内では、遺物は縄文時代にはじまるが、本調査区内で定住的な集落が形成されはじめた弥生時代から近代まで、約2,000年間、遺構の総数竪穴建物跡300軒、掘立柱建物跡5基、溝跡105基、墓14基、土坑1,335基、土器石器を中心とした出土遺物数はコンテナ562箱¹に達する。

浅川扇状地遺跡群の膨大な遺構と遺物の個別具体的な成果については、それぞれ発掘調査担当者がまとめているので、それらを参照されたい。こうした個別具体的な成果とは別に、各時代のトピックや課題をここに紹介し、今後の地域史研究の一助としたい。

移動から定住へ

歴史地理的環境にも触れられているように、長野盆地形成後、当地にも人類の生活の痕跡は見られる。本調査地点においては、竪穴建物跡のように定住した証拠である遺構の存在は明らかでないが、縄文時代の遺物が散見されることは、注目に値する。遺構に伴っておらず、わずか1点であるが、玦状耳飾片が出土している。平面形は金環状で、その切り口は平坦となり、糸切技法による切断と思われるので前期以前にさかのぼる可能性がある。周辺から早期末の土器が出土していることからも、約7,000年前は、本調査区内周辺に人類が進出していたことをうかがわせる。同じく浅川扇状地上に立地する松ノ木田遺跡では前期後葉の30点あまりの玦状耳飾など石製装身具が出土している（長野市教委1996）。こうした石製装身具は、拠点的集落のある程度限られた階層の成員の持ち物であり、人間集団が進出していただけでなく、当該期に拠点的な集落が当該地域に形成されていったことも想定される。

集落の形成と展開

弥生時代後期以前、集落自体は本調査区内には少なくとも展開していない。本村南沖遺跡（県立大学建設用地）の発掘調査報告書では、中期後半から後期にかけての浅川扇状地内の弥生集落群の分析が行われている。同遺跡の弥生時代遺構はほぼ吉田式期に限定されている。浅川扇状地でみると、中期後葉の栗林式期は、扇端部に、後期初頭の吉田式期に扇央部、箱清水式期になると扇頂部へも展開する（長野県埋文2017）。

こうした展開は長野盆地全体の傾向とも対応している。著名な遺跡や標式遺跡は、貴重な資料や土器型式の基準資料が出土しているというだけで、必ずしも当該型式の文化的中心とは限らず、全体を推測するには恣意的であるが、中期の標式である栗林遺跡をはじめ中期後半の中野市柳沢遺跡、同南大原遺跡及び松原遺跡といった拠点的な集落は千曲川沿いに展開する（川崎2005）。一方、後期になると、本遺跡をはじめ、吉田式の基準資料が出土している吉田高校グランド遺跡は、本遺跡同様に、浅川扇状地の中央に展開し、その吉田式に後続する箱清水式の標式である箱清水遺跡は、裾花扇状地脇の山際に展開する。

中期後半に千曲川に沿った地点に拠点的な集落が展開した後に、徐々に扇状地の中央や山際にまで集落

1 発掘届総数、整理完了後の総数は約800箱。

が展開する。千曲川沿岸では、中期後半から水田が営まれはじめ、後期にはいくつかの遺跡で水路を伴った形で確認されているが、浅川扇状地の中心部には、古墳時代まで水田が展開したことを裏付ける遺構・遺物は認められていない²。しかし、古墳時代前期ほどではないが、弥生時代後期を中心とする本遺跡から、北陸との関係をうかがわせる土器や口縁が2重となる壺（威信財的祭祀具か）を見ると、今後これらを支えた生産域が現調査地点より南側の低地部分で発見される可能性はあろう。

近畿地方内陸部で前方後円墳が作られ始めた古墳時代前期の土器の様相からは北陸や東海地域からの影響が看取でき、汎列島的な弥生時代から古墳時代にかけての変革は当地にも及んでは来ていたのだろう。しかし、当地では、弥生時代末から方形周溝墓が造営されはじめ、そのまま古墳時代前期にも、そのままの墓制が続いている。弥生時代以来の伝統が、そのまま古墳時代前期にも継続していた。汎日本列島的には、古墳時代中期に朝鮮半島経由で、カマド、須恵器、横穴式石室、ウマ文化といった所謂大陸起源の文化が波及し、長野盆地も例外ではないが、集落の展開を見たときには大きな断絶はない。

扇状地の開発と断絶

8世紀になると、本遺跡をはじめ長野盆地にも一般集落には本来的に存在しない遺物、律令制のもとで整備された官衙や寺院に関連すると思われる遺物（ここでは「官衙関連遺物」としておく）が一定程度出土している（柴田2019）。本遺跡出土でも和同開珎、帶金具（巡方）、筆立て付円面硯などが出土する。しかし、調査区内には、官衙そのものあるいは関連施設遺構は検出されていない。今回の調査区周辺に官衙や寺院があった可能性もあるが、こうした遺物の出土は、8世紀に当地の集落の拡充やその周辺の開発に、官衙と関わりが深い集団が関与したことを示していよう。

長野盆地の集落遺跡は、東日本全体の傾向とも思われるが、8世紀と9世紀つまり奈良時代と平安時代前期の間に断絶はない。しかし、本遺跡でも9世紀までは調査区内だけでも一時期30軒程度のかなりの規模の集落が営まれていたが、10世紀以降になると豊穴建物群は確認されていない。これについて、本報告者は、集落が別の場所に移動したと推定する。

ここで、注目されるのが、従来比定地不明とされてきた公領「吉野郷」であり、そこに着目するとこの謎の解明の一助となると考え紹介する。吉野郷は古野の誤記であり、その比定地には中越字古野と柳原地区の布野（古野）の二説がある（井原2000）。偶然であるが、両者の範囲内を埋文センターで調査している。前者の古野は、今回調査した北国街道以南の調査区が該当し、後者の布野については、2016年～2018年にかけて小島・柳原遺跡群の調査で縦断している（長野県埋文2020）。

両者の集落としての消長を比較すると、本調査区（古野）の集落跡は、9世紀末までがピークで、10世紀に下る遺構はほとんどない、逆に小島・柳原遺跡群（布野）の集落跡は、10世紀以降しかない。

両者が「吉野郷」の比定地であるという以上の、両者を結びつけるものがない³が、前者が廃絶して、後者へ移動したとすれば、吉野（古野）郷の比定地としてどちらかが正しいというのではなく、年代差があり、スムーズに説明できる。

犀川及び千曲川合流地点より上流の長野盆地南部については、「仁和地震」（887年）で八ヶ岳山体が崩壊し千曲川をせき止め形成された天然ダムが、翌年に決壊して引き起こされたと推定される「仁和洪水」（888年）によって、古代集落遺跡や水田域が洪水砂に覆われるような被害を受けている。こうした状況に

2 古墳時代中期以前の水田跡が北陸新幹線地点で確認されている（長野県埋文センター1998・河西2000）。

3 ちなみに、小島・柳原遺跡群は、10世紀（平安時代中期）以降に開発された一般集落遺跡でありながら、帶飾り（丸鞘）や8世紀（奈良時代）末頃に制作されたと考えられる塔鏡形合子といった珍奇な金属製品などの官衙あるいは寺院関連遺物が出土しており、本調査区の古代集落と共通する性格を有している。

着目し、9世紀末までにピークがある篠ノ井遺跡群と9世紀末以降にピークがある南宮遺跡については、前者から後者へ集団の移動・移住があったと推測する説もある（伝田2017）。

本調査区南端でも洪水に由来すると思われる中近世以前の可能性が高い砂が鐘錠堰南側から検出されているが、千曲川本流からは約4.5kmと離れているだけでなく、年代が特定できない。現段階では、本遺跡群の古代集落の消長を仁和洪水にだけ求めるのは難しい。

なお、本遺跡（調査区）南端を東西に横断している鐘錠堰は、『一遍上人絵伝』だけでなく、鐘錠堰から分かれる中沢川が平安時代末に開削されたことがわかっているので、平安時代末まで遡るという（福島2000）。調査区南端の現鐘錠堰より南側の中世以前の土層から、前述の洪水砂に覆われたウシの足あとが多量に検出されている（長野県埋文2019）。ウシが無意味に泥層を行ったり来たりしているとは考えにくい。本調査区内では、古代の水田遺構自体は検出されていないが、鐘錠堰周辺で水田開発が試みられていたことを示している。ただし、本遺跡では、水田遺構自体は全く検出されておらず、花粉分析の結果、古墳時代から平安時代にかけて、イネだけでなく、ソバが通時代的（古墳時代中期と中世）に一定量検出されている。明治初年でも、古野村は畑作優勢地域であった（長野県1985）ので、当地も前近代において、大規模な水田開発が達成されることとはなかったと考えられる。

村から町へ

桐原要害（高野氏居館跡）西辺に比定される一辺120m程度と想定される幅3m、深さ1mの堀跡SD1が検出されている。こうした規模の居館は長野盆地では最大級である（市川2001）。今回の調査では、出土遺物（内耳鍋など）から埋没しはじめたのが15世紀前半（室町時代）と想定されているが、隣接する長野市の調査で、東濃系山茶碗の卸皿や珠洲系の須恵質片口鉢といった13世紀後半に遡る遺物が出土している（長野市埋文2016）。また、桐原要害（2区）に隣接する1区と5区で中近世の墓が検出されている。副葬品が少なく、考古資料から年代をうかがわせる資料は乏しいが、骨自体のAMS炭素14年代測定で、鎌倉時代から江戸時代の年代に収まることがわかっている。中でも、墓SM5003は、長方形の伸展葬で、A.D.1030～1260年（平安時代末から鎌倉時代）という限定された年代が得られた。こうした中近世墓のうち、直葬の長方形土坑墓（SM4、SM5001、SM5003）は木棺墓と想定され、鹿角製品（SM5001）や小刀（SM5002）を副葬している墓もある。これらは、一般民衆というよりは開発領主に近い階層のものと考えたい。

以上のことから、桐原要害自体は南北朝期から室町時代にかけての争乱期に機能していたものかもしれないが、それ以前の鎌倉時代には在地領主によって開発が着手されていたのだろう。

なお、中世に開発を担った集団が、古代に別の地域に移動した集団と関連があるかどうかについては、直接物語る資料はないが、古代（奈良時代から平安時代初頭）の墨書土器が、のちの桐原要害範囲内からは「貝」、現在桐原牧神社の敷地内と周辺からは「△」（猪目）が集中して出土している（長野市埋文2012・伊藤2020）。墨書土器は、古代の集団の表象あるいは吉祥や祭祀とかかわるだけでなく、中近世の土地利用や性格とも関連していく事例が知られている（川崎2021）。当地の古代の土地の性格を中近世の人びとが踏襲しているとすれば、仮に、集落としては断絶したが、集団としての系統はつながっていると考えたい。

また、古代から中世にかけての地域史研究の課題として、『吾妻鏡』文治2（1186）年3月12日条に見られる信濃28牧の一つ、「吉田牧」を桐原地区に比定する問題がある（長野市誌1997・長澤ほか2019）。調査区内には牧の存在をうかがわせる遺構・遺物は検出されていないが、古墳時代から中世にかけて32点のウマの骨が検出されている。ヒトを除いた動物骨では最多出土であり、2位のウシ（7点）を凌駕してい

る。古代末以降建物跡群は検出されていないだけでなく、さらに、花粉分析でもソバが検出されていることから、一面水田であったような風景を復元することは難しい。発掘成果から積極的に肯定はできないが、今後とも「桐原牧」の存否は検討すべきだろう。

近世以前から吉田は交通の拠点であり、天正9年（1581）の『信濃国道者之御祓くばり日記』には「吉田の町」との記述がみられる。また、慶長年間（17世紀初頭）には、北国街道が現在の位置に定められたという（長野市誌1997・長澤ほか2019）。本調査でも、北国街道などの通り沿いに、近世以降の遺構や遺物の集中が見られる。中世末から通り沿いに往来や物流が活発化していたことを反映していると考えられる。

引用・参考文献

第1節

櫻井秀雄 1993「5本村東沖遺跡出土の祭祀遺物」『本村東沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第50集

長野県埋蔵文化財センター 2017『浅川扇状地遺跡群 本村南沖遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書113

長野市教育委員会 1993『本村東沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第50集

長野市教育委員会 2012『桐原宮北遺跡』長野市の埋蔵文化財第130集

長野市教育委員会 2016 a『桐原牧野遺跡』長野市の埋蔵文化財第143集

長野市教育委員会 2016 b『桐原牧野遺跡（2）・桐原要害（高野氏館跡）』長野市の埋蔵文化財第145集

第2節

伊藤 愛 2020「（2）浅川扇状地遺跡群桐原地区出土の猪目墨書き土器について」『長野県埋蔵文化財センターワン報』36

小松市教育委員会 2007『額見町遺跡II』

佐久市教育委員会 2017『周防端遺跡群 南近津III 若宮遺跡IV 宮の前遺跡I・II・III』、佐久市埋蔵文化財調査報告書第240集

佐久市教育委員会 2020『根々井居屋敷遺跡I』佐久市埋蔵文化財調査報告書第267集

田中広明 2015「3 上野国府域出土の陶硯について」『推定上野国府－平成25年度調査報告－』上野国府等範囲内容確認調査報告書III 前橋市教育委員会

鳥羽英継 2019「古代の役所－信濃最初期の役所が屋代に－」『ちようま』40 更埴郷土を知る会

直井雅尚 2002「長野県・山梨県・岐阜県の鎧帶」『鎧帶をめぐる諸問題』 奈良文化財研究所

長野県埋蔵文化財センター 2012「浅川扇状地遺跡群 筆立て付円面硯について」報道公開資料

長野市教育委員会 2012『浅川扇状地遺跡群 桐原宮北遺跡』

奈良文化財研究所 2002『鎧帶をめぐる諸問題』

奈良文化財研究所 2002『古代の陶硯をめぐる諸問題』

西山克己 2007「中部地域（山梨県・岐阜県・長野県）出の和同開珎」『和同開珎をめぐる諸問題（一）』奈良文化財研究所

吉田恵二 1985「日本古代陶硯の特質と系譜」『國學院大學考古学資料館紀要』第1輯

第3節

市川隆之 2001「長野市内の居館跡形態についての予察」『市誌研究ながの』8、長野市誌編纂委員会

井原今朝男 2000「北信濃の公領と地頭」『長野市誌第二巻歴史編原始・古代・中世』

伊藤 愛 2020「浅川扇状地遺跡群桐原地区出土の猪目墨書き土器について」『年報36 2019年度』長野県埋蔵文化財センター

河西克造 2000「善光寺平の水田遺跡」『川田条里遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書47

川崎 保 2005「遺跡から見た古代・中世の千曲川の水運」『信濃』57-12

柴田洋孝 2019「古代信濃国水内郡における寺院と周辺遺跡からみる土地利用状況」『國立館考古』7

伝田伊史 2017『古代信濃の地域社会構造』同成社

- 長澤要ほか 2019『桐原区誌』長野市桐原区
- 長野県 1985『長野県町村誌』郷土出版社
- 長野市教育委員会 1996『松ノ木田遺跡』長野市の埋蔵文化財77
- 長野市誌編さん委員会 1997『吉田』『長野市誌第八巻旧市町村史編旧上水内郡旧上高井郡』
- 長野市埋蔵文化財センター 2012『桐原宮北遺跡』長野市の埋蔵文化財130
- 長野市埋蔵文化財センター 2016『浅川扇状地遺跡群 桐原牧野遺跡(2)・桐原要害(高野氏館跡)』長野市の埋蔵文化財145
- 長野県埋蔵文化財センター 1998『浅川扇状地遺跡群・三才遺跡』(北陸新幹線)長野県埋蔵文化財センター調査報告書34
- 長野県埋蔵文化財センター 2017『浅川扇状地遺跡群 本村南沖遺跡』長野県埋蔵文化財センター調査報告書113
- 長野県埋蔵文化財センター 2019『年報35 2018年度』
- 長野県埋蔵文化財センター 2020『小島・柳原遺跡群』長野県埋蔵文化財センター調査報告書127
- 福島正樹 2000『善光寺平の条里』『長野市誌第二巻歴史編原始・古代・中世』